◆第2回　酪農家の生き残り戦略（前）

～高投入高泌乳路線の可能性～

酪農家、特に跡継ぎのいるところや若い経営者のところは、きちんとした経営戦略を立てなければ、生き残りが難しい時代になってきています。その理由は第１回で述べたとおりです。

今後、今までと同じことをしていたら、純益が低下するのは目に見えています。ですから、負債の償還がうまくいっていない酪農家は、基本的には負債償還のめどが立ってから新規事業に取り組むべきでしょう。今、負債返済の見通しが立たなければ、将来的にはさらに厳しくなるはずです。

生き残り戦略は、設備投資を伴なわざるを得ない場合が多いので、負債返済のための経営については次回以降に触れることにします。

酪農家が生き残り戦略として選択できる道は、大きく分けて３つ考えられます。

第１に、国策に沿って、現在の延長線を進む道です。これは高投入高泌乳路線です。牛の改良の専門家は、「日本の乳牛の年間泌乳能力は 20,000 キロに近いのだが、飼料と飼養方法の問題から乳量が平均 9,000 キロ程度で低迷している」と言っています。

乳量 10,000 キロを越える牛が全体の二割を越えた今日、意識的に交配方針を立てていかない限り、酪農家はこの路線上を走らされ、その結果として病気の多発、繁殖成績の低下が生じます。

10,000 キロを越えた牛群は、飼料設計方針がそれ以下の牛群と根本的に異なってきます。全く異質の飼料を使用することになりますし、給与形態もＴＭＲにして乾物摂取量を相当上げていかなければなりません。タイストールでのＴＭＲはあまりうまくいった例がなく、フリーストールも当然のごとく必要になってきます。

乳量 10,000 キロの牛２頭を飼うより乳量 20,000 キロの牛１頭を飼う方が生産コストの低減、労働の軽減、環境負荷の軽減が期待できると言われています。

ただし、高能力牛を飼い切れればの話です。実際には病気の多発、繁殖成績の低下、そして設備投資の必要性から、理論通りにはなっていません。（続く）

農業共済新聞　岩手版　2002 年７月４週号より